

## 第 17 話：戦後の我が国における主要水産缶詰の生産量動向

日本水産缶詰輸出水産業組合・日本水産缶詰工業協同組合

専務理事 松浦 勉

「サバ缶詰を食べよう」シリーズでは、第 1 話が「テレビ番組によりサバ缶詰人気上昇」、第 2 話が「消費拡大に伴うサバ缶詰の新商品開発」、第 3 話が「中央水産研究所のサバ缶マニア」、第 4 話が「サバ缶詰を使ったご当地料理」、第 5 話が「レシピ本にみるサバ缶詰料理」、第 6 話が「サバ缶レシピ本の出版動向」、第 7 話が「レシピ本とテレビ番組がきっかけを作ったサバ缶ブーム」、第 8 話が「統計資料からサバ缶ブームをみる」、第 9 話が「サバ缶ブーム下における青物 3 魚種缶詰の販売金額の動向」、第 10 話が「サバ缶の調理方法別消費動向」、第 11 話が「サバ缶ブーム期におけるサバ缶の輸入を含む供給動向」、第 12 話が「マグロ缶ブームとサバ缶ブームの比較」、第 13 話が「小売店舗におけるサバ缶の販売状況」、第 14 話が「ポルトガルの水産缶詰事情」、第 15 話が「八戸市で開催された鯖サミット」、第 16 話が「水産高校とサバ缶詰」についてお話しさせていただきました。17 話からは、戦後の我が国の水産缶詰の動向を何回かに分けてお話しします。まず、第 17 話は、「戦後の我が国における主要水産缶詰の生産量動向」についてです。

我が国における水産缶詰生産は、1899 年（明治 32）に北洋サケ缶の製造が企業化されたことにより実質的に始まりました。第 2 次世界大戦前の水産缶詰需要は、輸出用と軍用食を主体に増加しました。水産缶詰の生産量は、1935 年（昭和 10）には約 5 万トンであり、このうちサケ缶が約半分を占め、次いでイワシ缶、ツナ缶（マグロ・カツオ）が生産されました。戦前の水産缶詰生産量のピークは 1937 年（昭和 12）であり、その後戦争により減少しました。

戦後になると、製造技術の向上や輸出拡大により、1954 年には戦前の水産缶詰生産量を上回りました。1958 年の農産品を含む缶詰全体の輸出金額（510 億 1,300 万円）は、日本全体の輸出金額の 4.9%を占め、外貨を稼ぐ重要な輸出商品の役割を果たしました。

水産缶詰は、価格の高いサケ缶、カニ缶などが順調に生産されていましたが、それは長く続きませんでした。ニクソンショック（1971 年）による円の変動相場制への移行により陰りが見え、次いで、第一次石油危機（1973 年）、200 海里問題（1977 年）など、世界経済をゆるがす大きなできごとが次々と発生しました。北洋漁業が縮小し、サケ缶とカニ缶の生産が激減しました。捕鯨漁業も商業捕鯨の禁止へと発展し、クジラ缶の生産は壊滅的な打撃を受けました。一方、200 海里経済水域が設定された頃、我が国近海ではサバとイワシが大量に水揚げされていました。そして、1980 年には水産缶詰の生産量と輸出量がともにピークに達しました。しかし、1985 年 9 月にドル高是正を目的としたプラザ合意がなされ、為替の政策的な円高誘導により缶詰の輸出価格が上昇し、輸出競合国との競争の更な

る激化により、水産缶詰の生産量が激減しました。この結果、現在生産される水産缶詰は、ほとんどが国内販売向けになりました。以下に、青物（サバ、イワシ、サンマ、アジ）缶詰を念頭におきつつ、戦後の我が国における主要水産缶詰の生産量の動向についてお話しします。

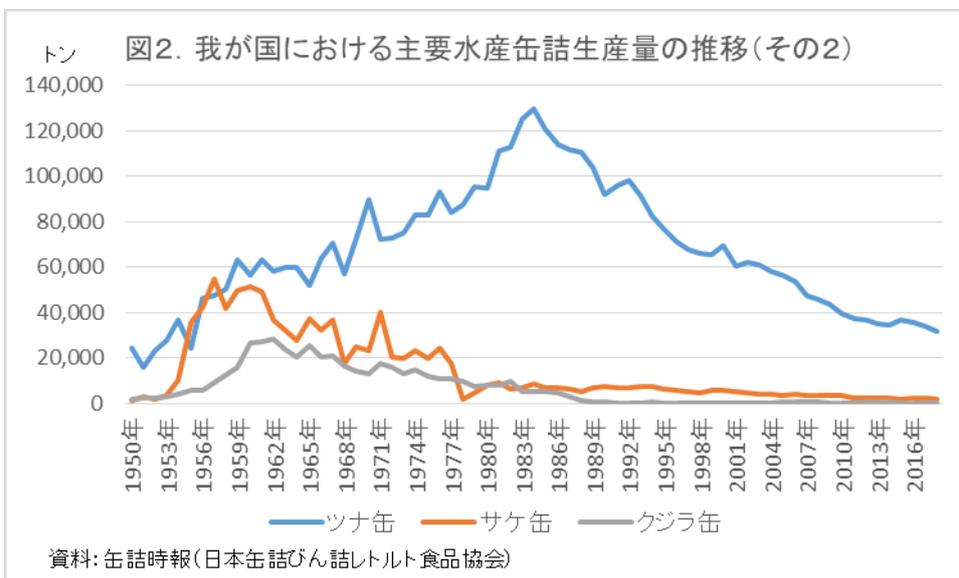
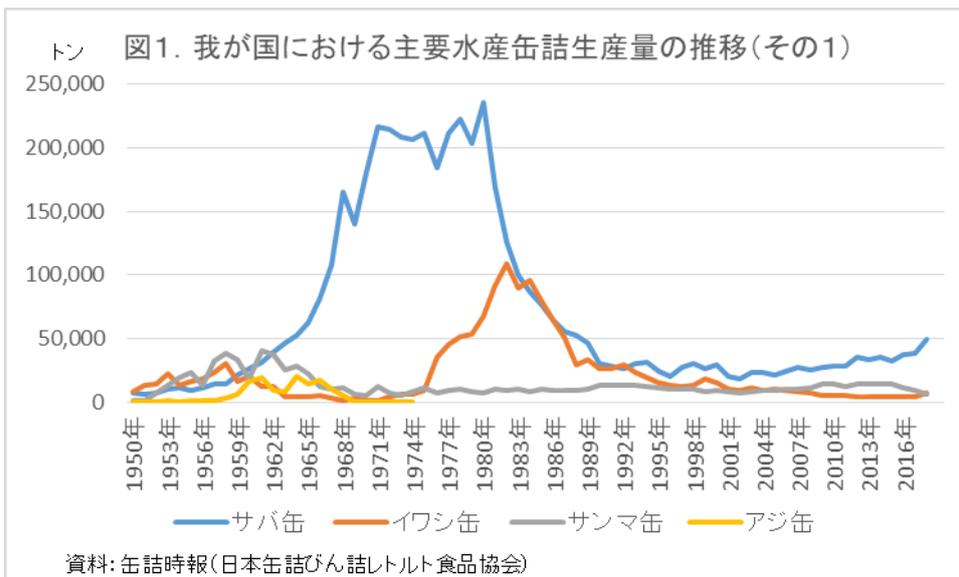


図1に「我が国における主要水産缶詰生産量の推移(その1)」、図2に「我が国における主要水産缶詰生産量の推移(その2)」を示しました。ここでいう主要水産缶詰とは、国内における生産量が1万トン以上の実績を有したサバ缶、イワシ缶、サンマ缶、アジ缶、ツナ缶、サケ缶、クジラ缶の7品目をいいます。これら以外の生産量が1万トンに満たなか

った品目には、カニ缶、イカ缶、カキ缶、アサリ缶などがあります。時系列変化として、1950年から2010年までの10年毎と2018年（直近年）の主要水産缶詰生産量を示しました。

#### ①1950年代

1950年の水産缶詰生産量は49,246トンであり、1万トン以上生産したのはツナ缶(24,225トン)のみでした。

長崎県では1947年～1953年にかけてマイワシの大漁が続き、1950年、1951年頃からイワシ缶が多く生産されました。

マイワシが不漁になった1954年頃から、長崎県ではアジが漁獲されるようになりました。アジはそれまで価格が高かったため、缶詰原料用にはほとんど利用されませんでした。ところが、長崎市内のある缶詰会社が価格の下がったアジに目をつけ、イワシトマト漬けの代替品としてアジトマト漬けを生産したところ、輸出が増えたため、アジ缶を生産する缶詰会社が増えました。アジ缶の生産は1948年から本格的な生産が始まり、1961年まで著しい伸長をみせましたが、1962年には半減しました。

#### ②1960年代

1960年の水産缶詰生産量は259,150トンであり、1万トン以上生産したのが7品目でした。ツナ缶(56,714トン)、サケ缶(51,677トン)、クジラ缶(26,887トン)、サバ缶(26,353トン)、イワシ缶(20,056トン)、サンマ缶(17,932トン)、アジ缶(15,928トン)の順に多く生産されました。このうち、上位3品目は高価な缶詰、4位以下が大衆価格の青物缶詰でした。

サケ缶は、1950年代後半から1960年代前半にかけて順調に生産されました。しかし、1967年以降、日ソ漁業交渉により我が国のサケ漁獲割当量が逐年減少の一途をたどりました。また、サケは、生鮮・塩蔵向けの国内需要の高まりにより魚価が高騰したため、缶詰生産が減少しました。

アジ缶は、山陰地区（鳥取県と島根県）でも生産されましたが、アジ漁獲量が減少し価格が高騰したため、生産されなくなりました。なお、全国的にみると、1975年以降アジ缶生産量がゼロになりました。

その後、サバの漁獲量が増加したため、多くの缶詰会社がアジ缶からサバ缶に転換しました。サバ缶生産量は、1968年～1982年まで水産缶詰の中でトップになりました。

#### ③1970年代

1970年の水産缶詰生産量は350,137トンであり、1万トン以上生産したのが4品目でした。サバ缶(180,540トン)が半分を占め、次いで、ツナ缶(89,631トン)、サケ缶(23,257トン)、クジラ缶(13,437トン)の順に多く生産されました。サバ以外の青物缶詰は、漁獲

量の減少により生産量がすべて1万トン以下になりました。

サバ缶生産量は、1970年代はほぼ20万トン台で推移しました。また、イワシ缶も1976年以降3万～5万トンに増加し、サンマ缶も1971年、1975年、1978年には1万トンに増加しました。

#### ④1980年代

1980年の水産缶詰生産量は448,415トンであり、1万トン以上生産したのは3品目でした。サバ缶(235,932トン)が半分を占め、次いで、ツナ缶(94,520トン)、イワシ缶(67,575トン)の順に多く生産されました。

サケ缶は、米ソの200海里経済水域の設定によりサケ漁獲量が激減したため、1977年をもって我が国の工船サケ缶の生産が終了しました。このため、サケ缶生産量は、1977年の17,813トンから1978年には1,656トンに激減しました。

クジラ缶は、商業捕鯨の禁止により壊滅的な打撃を受け、1982年の10,037トンから1988年には1,095トンに激減しました。

1983年にはサバ缶生産量が減少したため、水産缶詰の中でツナ缶生産量が再びトップになりました。ツナ缶は、1980年代には9万～12万トンの高い生産量を維持し、1984年が129,720トンのピークでした。

#### ⑤1990年代

1990年の水産缶詰生産量は194,169トンであり、1万トン以上生産したのが4品目でした。ツナ缶(92,113トン)が半分近くを占め、サバ缶(30,412トン)、イワシ缶(26,147トン)、サンマ缶(13,286トン)の順に多く生産されました。

ツナ缶は1990年代になると生産量が減少し、1999年が65,507トンでした。これは、輸出競争国との競争激化により輸出量が減少したためです。

サバの漁獲量は、1990年には27.3万トン(前年が52.7万トン)に減少し、1950年代後半並みの低水準に落ち込み、缶詰原料が不足しました。このため、ノルウェーなどから輸入したサバも利用して缶詰を生産しました。

#### ⑥2000年代

2000年の水産缶詰生産量は152,154トンであり、1万トン以上生産したのが3品目でした。ツナ缶(69,470トン)が半分近くを占め、次いで、サバ缶(29,845トン)、イワシ缶(15,416トン)の順に多く生産されました。

マイワシの漁獲量は、1998年には16.7万トン(前年が28.4万トン)に減少したため、2000年代になると、アメリカ西海岸やメキシコ湾から輸入したイワシも利用して缶詰を生産しました。

一方、サバは、2006年になって漁獲が好転したので、国産サバを使用した缶詰生産が増

加しました。

#### ⑦2010年代

2010年の水産缶詰生産量は105,797トンであり、1万トン以上生産したのが3品目でした。ツナ缶(39,521トン)、サバ缶(28,235トン)、サンマ缶(14,637トン)の順に多く生産されました。

マイワシの漁獲量は、2009年の5.7万トンから2011年には17.6万トンに増加したため、国産マイワシによる缶詰生産が増加しました。

また、2014年にはサバ缶の生産量がツナ缶を上回り、水産缶詰生産量の中でサバ缶が再びトップになりました。

#### ⑧2018年

2018年の水産缶詰生産量は104,410トンであり、1万トン以上生産したのがサバ缶(49,349トン)、ツナ缶(31,756トン)の2品目でした。

サバ缶は、2017年秋に人気テレビ番組等で栄養成分や美味しさが相次いで紹介され、需要が急増しました。このため、2018年のサバ缶生産量は、4.9万トン(前年が3.9万トン)に増加しました。

また、イワシ缶の生産量は、2006年以降、サンマ缶を下回っていましたが、2018年にはイワシ缶がサンマ缶よりも多くなりました。

青物缶詰は、原料が我が国近海で主に漁獲されるので、他の水産缶詰に比べて缶詰原料の輸入依存度が低く、青物缶詰の合計生産量が比較的安定的に推移しています。このため、水産缶詰生産量に占める青物缶詰の比率は、1950年の35%から2018年には61%に上昇しました。